



写真-1 大池越しに須磨寺を撮影（令和4年4月）

■ 「新吉野」と呼ばれた桜の名所・須磨寺遊園地

上の写真-1は、大池の浮御堂から、池越しに須磨寺を撮ったもので、池の周りに植えられている桜はすでに散り始めていました。子供の頃このあたりを遊び場にしていた筆者の記憶によると、昭和30年代の須磨寺公園は、花見の頃になるとブルーシートで埋め尽くされ大勢の花見客で賑わっていましたが、この日は平日ということもあってか公園には家族連れが数組いるだけでした。また、須磨寺の境内の方も、観光客や花見客はまばらでした。

大池は、明治から大正にかけての地図では「堂谷池（どうやいけ）」あるいは「大蛇池」と記されていますが、筆者はこの呼び名を聞いたことがなく、地元の方も筆者同様「須磨の大池」あるいは単に「大池」と呼んでいます。

須磨寺は、正式には上野山福祥寺（じょうやさんふくしょうじ）ですが、古くから「須磨寺」と呼ばれ、ほとんどの古地図にも「須磨寺」と表記されています。その須磨寺には、『源氏物語』須磨の巻の「植えし若木の桜、ほのかに咲きそめて」というくだりから名付けられた「若木ノ桜」という名木があって、これに武蔵坊弁慶が「一枝を伐らば一指を剪るべし」との制札を立てて保護したと伝えられています。

明治の中頃、暴風雨の被害により荒れ果てていた須磨寺に観光客を誘致しようと、当時の長原密浄住職が木や花を植え、茶屋を開いたのが須磨寺遊園地の始まりと言われています。



写真-2 須磨寺（左から三重塔、八角堂、大師堂）

この住職の思いに賛同した神田兵右衛門（こうだひょうえもん：兵庫運河建設に貢献した実業家で「神戸発展の父」と呼ばれた。『ひょうご水百景 No.87』参照）が、荒廃していた須磨寺の境内や池の周りに千本の桜を植えようと発願し、明治24（1891）年、作楽帳（さくらちょう）という粋な寄付帳をつくり、広く篤志家を説いて千人悲願の桜樹集めをされました。伊藤博文、田

中光頭、東久世通詞といった神戸ゆかりの名士をはじめとして有名・無名の人々がこれに名を連ね、たちまち千本桜が実現したばかりか、この話に某新聞社が感激して、さらに500本の大口を追加したため、日清戦争(明治27~28年:1894~95)の頃には神戸屈指の桜の名所となり、奈良の吉野に例えて「新吉野」とまで呼ばれるようになりました。

その上、明治43(1910)年3月、兵庫電気軌道(現・山陽電鉄)が第1期線として兵庫~須磨間に電車を走らせるとともに、須磨寺から土地を借りて動物園、ボート乗り場、花人形館などの遊戯施設を次々とオープンさせ、遊園地を整備していきました。大池北に設けた「花の人形館」では、春の霧島人形・菖蒲人形、秋の菊人形を大正11(1922)年から催し、大池東に開園した動物園は子供たちの人気を集め、花の季節には大変な賑わいだったそうです。

須磨の人々の憩いの場だった須磨寺遊園地ですが、昭和恐慌^{※1}の影響で催し物の縮小が行われ、太平洋戦争の開戦で戦時徴用工の宿舍用地となったことで姿を消しました。(昭和30年代、貸しボートはあったけれど……)

なお、現在の須磨寺公園は、大池の北の一部を埋め立てて平成9(1997)年5月に完成しています。

※1 昭和恐慌:昭和4(1929)年10月にアメリカ合衆国で起き世界中を巻き込んでいった世界恐慌の影響が日本にもおよび、翌昭和5(1930)年から昭和6(1931)年にかけて日本経済を危機的な状況に陥れた、戦前の日本における最も深刻な恐慌。第一次世界大戦による戦時バブル(=日本の大戦景気)の崩壊によって、銀行が抱えた不良債権が金融システムの悪化を招き、一時は収束するものの、その後の金本位制を目的とした緊縮的な金融政策によって、日本経済は深刻なデフレ不況に陥った。

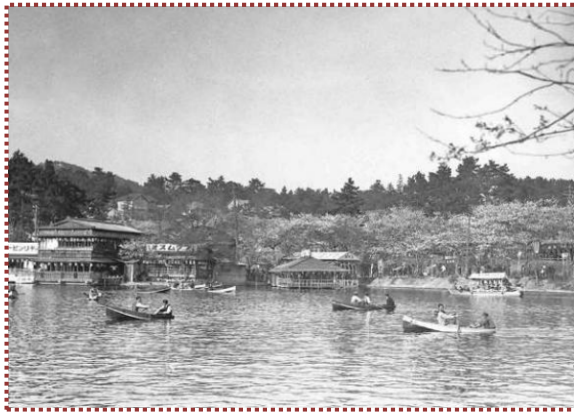


写真-3 昭和初期の須磨寺・大池
(『須磨町 神戸市編入100年記念誌』から引用)

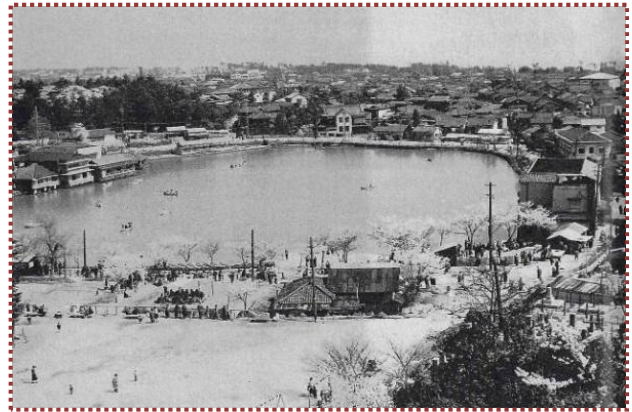


写真-4 昭和30年4月花見客で賑わう須磨寺・大池
(『須磨区70年の歩み』から引用)

■ 数々の歴史に彩られた須磨寺

須磨寺は、淳和天皇の頃(823~833年)に漁師が和田岬の沖で聖観音像を引き揚げ、会下山の北峯寺に安置していたのを、仁和2(886)年に間鏡上人(もんきょうしょうにん)が須磨の地に移したのが始まりとされています。本堂内の室町期の宮殿・仏壇や木造の十一面観音立像など重要文化財も多く、平敦盛遺愛の「青葉の笛」や弁慶の鐘、さらに敦盛首塚など、多数の重宝や史跡があり、文人墨客の来訪が多かったことから境内には松尾芭蕉、良寛、正岡子規、山本周五郎などの文学碑が点在しています。

芭蕉は、貞享5(1688)年4月20日に須磨を訪れていて、その時の様子は宝永6(1709)年に出された『笈の小文』に詳しく記されています。須磨寺を詠んだ句碑が本坊近くにあり(写真-7)。

毎月20日、21日の“お大師さん^{※2}”には参道に屋台が出て多くの人で賑わいます。(筆者が住んでいた頃は21日だけ)



写真-5 須磨寺参道(龍華橋の向こうは仁王門)



写真-6 本堂



写真-7 芭蕉の句碑(須磨寺ゆ 心かぬ笛きく木下闇)

※2 お大師さん：真言宗の宗祖・弘法大師のこと。須磨寺は古くから「須磨のお大師さん」の名で親しまれ、この地域での弘法大師信仰の中心的な霊場であった。毎月 20 日と 21 日は、弘法大師入定の日（3月21日）の縁日として、様々なお勤めや行事を執り行い、参道には多くの屋台が出る。本堂横の大師堂には宗祖弘法大師ならびに真言八祖が祀られている。大正時代の一時期、この堂には孤独奇矯の自由律の俳人・尾崎放哉（おさきほうさい、本名：尾崎秀雄）が堂守として住み込んでいた。彼はここで多くの句作を遺したが、特に「こんなよい月をひとりで見つて寝る」の句は最高傑作として、今、本堂前の句碑に刻まれている。

■ 千森川はいつ暗渠化されたのか？

大正期後半から昭和初期にかけて、神戸市内のいくつかの河川は、交通の確保や遊歩道利用などのために暗渠化されました。

千森川の暗渠化もこの頃に行われたと考えられますが、具体的な時期について言及した資料は見つかりませんでした。ただ、昭和 13（1938）年 7 月の阪神大水害では、流出した土砂が暗渠を埋めていることから、この時はすでに暗渠化されています。

そして、昭和 8（1933）年の「実地踏測神戸市街全図」や昭和 7（1932）年測図修正した大日本帝国陸地測量部の 1/10,000 地図「須磨」では開渠の状態であることが確認できました。

なので、千森川が暗渠化されたのは、昭和 8（1933）年から昭和 13（1938）年の間ということになります。

因みに生田川が暗渠化されたのは昭和 7（1932）年です。



図-1 千森川周辺の地図

■ 堂谷川の川池・「須磨の大池」

明治から大正初期にかけての須磨はほとんどが田地、そのための溜池も数多くありましたが、大正末期から田地の宅地化が進み、ほとんどの池は埋め立てられていきました。埋立地は、その多くが学校用地に転用される中、須磨の大池は須磨寺遊園地の開園もあって埋め立てを免れました。

昭和 36（1961）年には池畔に温泉が発見され、須磨温泉として今も湧出しているようです。ただ、温泉湧出以前から池の周りにあった 2 軒の旅館（たしか「寿楼」と「延命軒」）は、「寿楼」だけになっています。



写真-8 大池の洪水吐

ところで、大池（堂谷池）に流れ込んでいる溪流名がわかりません。県の砂防課で「六甲砂防事務所管内平面図」を見せてもらったところ、大池上流にある砂防堰堤の名称が堂谷堰堤（H=13.0m、L=41.0m、昭和54年12月竣工）となっていたので、溪流名はおそらく堂谷川と思われます。

この溪流の水は大池に流入し、池の洪水吐（写真-8）から近くの道路下の千森川（暗渠）に流れ込んでいます。



写真-9 JR千守踏切下で開渠となる千森川
（河口部）



写真-10 大池東の道路下が千森川暗渠
（中流部）



写真-11 神戸女子大横を流れる千森川
（上流部）

■ 阪神大水害で被災

阪神大水害における千森川の被災状況は、『神戸市水害誌』によると概ね以下のとおりです。

千森川は、上流で発生した山崩れの土砂が暗渠を埋めてその上を流れ、須磨寺前を出て、小屋ヶ谷川の濁流と合流、千森川の右岸側を土砂で埋めながら国道2号に出た。

その小屋ヶ谷川は、青川と合流して、須磨寺の境内付近で氾濫し、約70間（≒127m）の川幅となって境内を洗い、そのため新吉野と呼ばれた桜の名所は6～7尺（≒1.8～2.1m）の土砂で覆われ、一方、大池北からの山津波は大部分が大池に流れ込み池の1/3ほどを埋めるとともに、一部は須磨寺の参道を流れた。

また、須磨寺町にも流れ込んだ千森川上流部からの濁流は、山陽電鉄の軌道を越え、須磨寺駅東の道路を南下し国道2号に達した。氾濫により国鉄（現JR）須磨駅付近から天神町に至る低地は、床上2尺（≒0.6m）まで浸かるほどの状態であった。

千森川の復旧工事は、武庫離宮南端から河口に至る1,115mを改修区間とした。

■ 災害時には貴重な水源となった「須磨霊泉」

須磨寺門前の北東角に湧いている地下水は「須磨霊泉」（写真-13・14）と呼ばれていて、大池周辺から湧いているといわれています。「須磨霊泉」と刻まれた石碑（写真-12）が建っており、そこには大正13（1924）年建立とあります。

昭和13（1938）年7月の阪神大水害や平成7（1995）年1月の阪神・淡路大震災の時には貴重な水源となり、多くの被災者を救ったことから、地元では「命の水」とも呼ばれているそうです。



写真-12 石碑



写真-13 須磨霊泉



写真-14 須磨霊泉（湧出口から上洗、下洗へと流れている）

ただ、神戸市が10年以上前から水質検査を実施していますが、大腸菌がたびたび検出され飲用不適になっていることから、飲む場合は必ず十分に煮沸してください、との注意書きがありました。また、今もそれなりの水量が出ていますが、以前に比べ水量が減少しているような気がしています。

■ モノローグ

令和4(2022)年4月初旬、山陽電鉄の須磨寺駅で降り、久しぶりに須磨寺商店街(写真-15)を須磨寺に向けて歩きました。小学生の頃をこのあたりで過ごしたので商店の名前など不思議とよく憶えている(昨日の夕飯のおかずはなかなか思い出せませんが)、露地や坂、溝などあらゆるものが懐かしく、郷愁に浸りながら須磨寺と大池を巡りました。

千森川が暗渠だったことは小学生の頃から知っていました(道路上を歩いていると、下から水の流れる音がする)が、小屋ヶ谷川の一部が暗渠だったことは今回初めて知りました。そういえば、その小屋ヶ谷川暗渠部付近に昭和30(1955)年頃、神戸土木出張所(現・神戸土木事務所)があったことを思い出しました。



写真-15 須磨寺商店街

【参考資料】

- 1 『新修神戸市史・歴史編Ⅲ近世』 神戸市 平成4年4月
- 2 『新修神戸市史・行政編Ⅲ都市の整備』 神戸市 平成17年3月
- 3 『明治・大正・昭和のおもかげ集』 荒尾親成 昭和44年9月
- 4 『Vol.2 須磨寺公園』 神戸市須磨区HP
- 5 『古地図で楽しむ神戸』 大国正美 令和元年12月
- 6 『江戸時代の絵図と歩く～神戸・阪神「名所」の旅』 大国正美 平成28年12月
- 7 『神戸市水書誌』 神戸市役所 昭和14年7月
- 8 『須磨寺公園に「新吉野」の面影を求めて～せつつ・はりま歴史散歩』 山陽沿線ブログ 平成25年3月
<https://www.blog-sanyo-railway.com/sanyo-003/2013/03/26/>
- 9 『須磨の近代史～明治・大正・昭和史話』 神戸市須磨区役所 平成10年3月
- 10 『昭和恐慌、兵庫電気軌道、ハウライシダ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 11 『須磨の歴史』 神戸女子大学史学研究室編 平成2年11月
- 12 『大師堂』 須磨寺HP
<https://www.sumadera.or.jp/index.html>
- 13 『ハウライシダ』 関西の花HP 平成26年3月更新

ハウライシダ (蓬菜羊歯)

ハウライシダ科ハウライシダ属のシダ植物で常緑性の多年草。岩などに固着して生育する。形態の美しさから観賞用に栽培されることがあるが、その際には、総称として属名のアジアタムと呼ばれることもある。栽培はそれほど容易ではなく、排水や保水の良い用土、適切な湿度調整などが求められる。兵庫県下では南部を中心として、市街地の溝や湿った石垣から山中の砂防ダムの壁面にまで自生・群生しているのが見られる。右は、須磨寺近くの溝の古くなったコンクリート壁に着生していたもの。



写真-16 ハウライシダ

※発刊：令和4(2022)年6月 『ひょうご水百景』 No.150

改訂：令和8(2026)年4月 『ひょうご水百景』 No.150